



大阪野江の刑場にあった題目石碑が、現在「義天寺」に移され供養されています。

歩いて感じる400年の宿駅と街道



「一里塚跡」

江戸時代、街道に一里(4キロ弱)ごとの距離を表し、旅人などの目印になっていた。当時は街道の両側にあり、現在は京に向かって左側の敷地20坪ほどの所に、昭和40年(1965年)記念碑を建てました。



「五ヶ荘用水路跡」
淀川より水を取り入れ田畑などに水を引いていました。



当時、瓶橋付近で青木家は丸亀という屋号で呉服店を営んでいたそうです。
青木公子さん(右)
娘の森本明子さん(左)

「盛泉寺」から150メートルほど歩く「瓶橋」がありました。元々、土橋(木造りの橋)だったものを、嘉永元年(1848年)に村人が、私財を出し合って石橋にしました。名前は当時守口を支配していた代官が命名したといわれています。現在は「かめばし」と書いた橋柱が2本残っています。



「瓶橋跡(江戸時代公儀橋) 幕府の費用で建設された橋」
橋の名の由来
「瓶」は「瓶」の如く「口」を守るといふ意味



奈良へと続く石畳の小道

旧奈良街道へ通じる来迎坂

守口宿でも数少ない江戸時代の名残を感じさせる古びた石畳の坂道です。旧奈良街道(約1200年前に行基によりつくられたと言われています)へと通じる幅1メートルほどで、「右ならのざきみち」の小さな道標があります。この道は「難宗寺」へも通じており、大名行列が鉢合わせなどのときは、この道から「難宗寺」へ避難したと思われる。



豊臣秀吉がこよなく通ったとされる守口。吉田宅庭には、秀吉が足休めにしたと伝えられる遺石が残っています。



明治初期の看板で「葛根湯(風邪薬)や「あかぎれ軟膏」がよく売れました。

浜町の角に、宿場役人で、代々薬屋吉田長寿堂として反映したのが吉田家で、先代の吉田義昭さんの業績は大きく郷土研究に情熱を燃やし、守口市文化財研究会の創立時に長年尽力され、その遺志は息子である吉田幸司さんに継がれています。街の文庫として地域の人と共に「竜田文庫」を立ち上げ、守口宿の歴史文化の普及に尽力されています。



吉田幸司さん

問屋役人・吉田為五郎邸

文禄堤沿いの街並みは、すっかり様変わりしましたが、数年前まで江戸時代当時(築約180年前)の面影が残る家屋を守り続けてきた西田崇さん(92歳)。40年にも及ぶ守口宿の茜屋(当時の呉服店)の家系に生まれまし

代々家系を守り続けた 守口宿の守り人



にしだたかし 西田崇さん

92歳とは思えない活動力には驚きます。今も歴史にゆかりのある地を散策されており「歴史散歩部会報」を作成しています。旧松下電器の技術部門で活躍され、パソコンはお手の物。現在も現役で、茜屋があった地にご自身で設計した家を建設中。完成は来年で、当時の造りを思わせる外観や、中二階造りを取り入れた設計にし、文禄堤の景観に気をつけたといっています。



今年6月まで現存していた 築180年(天保8年建造)の西田家



江戸時代、茜屋で売買されていたことを示す古文書

夢は大きく、未来に継承



守口宿をPR(宣伝)する加藤忠廣さん “守口の歴史は消えることがない。守口の歴史の一里塚として次代につなぐことを強く感じています。夢は東海道を世界遺産に！市内外の皆さんにも守口市の魅力を知ってもらいたい” そう語ってくれたのは、加藤忠廣さん。守口市の歴史を伝えていくため、文化団体のボランティアとして立ち上げた「守口門真歴史街道推進協議会」で積極的に活動され、守口市の歴史を発信していきます。

人が集まり栄える地に...



卯建や虫籠窓のある宿場町の面影が残る建物(三好写真館)

昭和22年、現在の文禄堤の地に先代が写真館を開いた「みよし写真館」の2代目である三好章さん。夢はこれから。この地で写真を繁栄させ、流る行らせることで人が集まる地になりたい。この建物を残しながら、昔の面影



みよしあきら 三好章さん。先代から使われている約100年前のアニソニーカメラ

を壊したくない。守口市に愛着を持つてからこそ、レガシー(遺産)を残し、この時代に生かしたいと強い想いを持たれています。 3代目の息子さんに技術を継承しながら、文禄堤が守口のシンボル地となるよう、夢に向かってこれからの文禄堤を支えます。